

韓国キリスト教における 初期大復興運動に関する一考察

A Study of the Initial Revival Movement in Korean Christianity

李 致 萬

Lee, Chiman

キーワード

韓国キリスト教、キリスト教社会運動、大復興運動、信仰の内面化、非政治化

KEY WORD

Korean Christianity, Christian social movement, Revival movement, internalization of faith, de-politicization

要旨

初期大復興運動は、1907年に平壤（ピョンヤン）を中心に拡大した。大復興運動の背景には、内的側面と外的側面があるが、本論では内的側面を中心に考究する。すなわち、当時の歴史的状況と絡み合って、宣教の危機を感じた宣教師の特定の意図によって、大復興運動が行われたと思われる。大復興運動は確かに韓国キリスト教会を外形的に、また内面的に大きく変えた。外形的変化としては、急激な量的膨張、教会自治の成立、リーダーシップの交替などをあげることができる。内面的変化としては、新しい信仰様態の形成、韓国的教会文化の定着などである。これと共に初期大復興運動は、韓国キリスト教の非政治化を定着させるきっかけになった。

一方、キリスト教社会運動の視座から見ると、初期大復興運動は、教職者中心の非政治的性格の「公的教会組織」と、一般信徒中心の社会運動に積極的な「包括的キリスト教団体」に二分化した。この二分化によって、韓国キリスト教社会運動は弱体化せざるを得なかった。もちろん、「包括的キリスト教団体」には、「公的教会」に属したキリスト者が多数参加していた。そこで、社会運動の実践方法は、「公的教会」の

信仰的価値を損なわない範囲で行わざるを得なかった。このような面が韓国キリスト教社会運動の「人道的平和主義（非暴力主義）」を形成する一つの要因になった。また、以後の三・一運動における非暴力・無抵抗主義の路線は、三・一運動の主な勢力であった韓国キリスト教の「人道的平和主義」の路線に起因したのではないかと思われる。

SUMMARY

The initial Revival movement saw its beginning in Pyong-yang in 1907. The Revival contained both internal and external characteristics but this study focuses its analysis on the internal factors. The movement was promoted by a specific intention of missionaries who felt a crisis situation in the historical time as well as in the work of their mission. The movement clearly affected the totality of the Korean Christianity. Externally observed, quantitative expansion, strengthening of self-governance and changes in leadership are noticed. On the internal factors, the movement led a formation of new faith as well as cultivation of indigenous culture in the church life. The movement provided a momentum which led to the phenomenon of de-politicization of Korean Christianity. From the social movement perspective, the Revival caused a division among churches. One group is composed of congregations with leaders who emphasized the de-politicization process and the other group was committed to social active understanding of Christian faith. Organizationally and in terms of ideology, the latter group could not avoid the weakening as the first group was definitely more dominant. The practical expressions of the latter group were restricted by a sense of caution not to damage the Christian foundation on which they were envisioned. This situation caused a rise of human pacifism among Korean Christianity. One expression of this development, possibly, was seen in the principle of ahimsa non-resistance thought and the action observable in the March 1 movement.

I. はじめに

韓国にキリスト教が受容されはじめた時期は、対内的には開化と改革のための社会変化の欲求が各階層別に噴出し、伝統的精神文化である儒教秩序が急速に崩壊しつつあった。また、対外的には押し寄せる外国勢力の脅威の中で、韓国社会は民族的自立と近代的国家の樹立という課題を抱いていた。こうした時代的要請の中で、西欧の精

神文化としてのキリスト教は急速に成長し、韓国社会の一員として堂々と位置づけられた。

その中で、初期大復興運動は、韓国キリスト教会の外形的変化と内面的変化を引き起こした。そして、このような変化は、韓国キリスト教の新しい歴史的特質を具現したと指摘されている。この研究論文は、まず韓国キリスト教の初期大復興運動の過程とその歴史的特質を、韓国キリスト教の社会運動の視座から探ろうとする。また、大復興運動の歴史的特質が韓国キリスト教のその後の歴史と社会運動にどのような影響を及ぼしたのかを考察しようとする。

韓国キリスト教の初期大復興運動についての先行研究は、研究者毎にその重点が異なっているが、それを概略的に整理すれば、肯定的な評価と否定的な評価に分けることができる。¹肯定的な評価は、大復興運動での韓国的宗教慣習の定着、韓国キリスト教会の成長、信仰の内燃を通じての民族教会の具現などを高く評価している。一方、否定的な側面は、韓国キリスト教会の民衆排除の契機、韓国キリスト教会の没歴史化、西欧（対米）従属の深化などを指摘することができる。

大復興運動はその背景において、当時韓国が置かれた国内外の情勢と密接な関連があった。また宣教師たちの特定の意図と主導によって形成された。そして、その展開過程では新しい信仰様態が現われ、平壤（ピョンヤン）という特定の地域を中心に組織的に拡大した。その結果、韓国社会の新しい宗教文化として定着したのである。したがって、この研究論文の研究範囲は、1907年の平壤での復興運動を集中的に扱いながら、「平壤復興会」の源流になった1903年の元山（ウォンサン）での復興会と1909年の「百万救霊運動」までをその範囲とする。

II. 大復興運動の考察のための前提となる理解

1. 時代的背景

初期大復興運動の背景には、なによりも当時韓国の暗澹とした国内外の情勢をあげることができる。日露戦争に勝利した日本は、大陸侵略の足場である韓国の植民地化を本格的に推し進めた。日露戦争中、「韓日議定書」（1904年2月）と「韓日外国人顧問傭務に関する協定（第1次韓日協約）」（1904年8月）を韓国政府に強制的に締結させた日本は、韓国の植民地化についての列強の承認を得るなど、国際環境を造成した。ついに、1905年11月に「第2次韓日協約」（以下、乙巳条約と称する）を強制的に締結した。この条約によって韓国は、国家のすべての主権が剥奪され、日本の「保護」下に置かれるようになった。そして、自主的な国家として認められず、国際的にも孤

立した。さらに、1907年6月「ヘイグ密使事件」をきっかけに、日本は同年7月に「丁未7条約」を強要し、密使事件の責任を問い、高宗（当時の大韓帝国の皇帝）を強制的に退位させた。なおかつ、かろうじて命脈を維持していた韓国政府軍も強制的に解散させた。

日本による国権侵奪に対して、韓国民衆は国権を回復しようとする、いわゆる「国権回復運動」を展開した。国権回復運動は大きく抗日義兵運動の武力抗争と愛国啓蒙運動の実力養成運動として展開された。特に、韓国キリスト教は、民族の運命が風前のともしびのような時期に、愛国啓蒙運動に積極的に参加した。当時愛国啓蒙運動の主導勢力は、宗教、道徳など精神文明の刷新なしに、西欧の技術文明や制度だけを取り入れても、自主独立と文明開化を成し遂げることができないと考えた。ところが、愛国啓蒙運動の主導勢力は精神の改革、道徳の刷新は既存の儒教的思想によっては不可能であると認識した。儒教的秩序としては、国権剥奪の危機になすすべがなかったのである。それで、「宗教救国論」、「無形の自強論」などの社会的期待感に励まされ、韓国キリスト教は積極的に民族の危機を切り抜けようとした。韓国キリスト教会は、乙巳条約に反対する一時的運動だけでなく、学校教育による意識改革運動、言論と講演による大衆啓蒙運動、結社団体による政治社会運動などの愛国啓蒙運動の先頭に立った。すなわち、この時期の韓国キリスト教会は、キリスト教に対する高い社会的期待感のなかで、積極的に政治社会的流れの主導的な役割を果たした。

2. 初期韓国キリスト教と宣教師

日帝下の韓国にプロテスタント宣教師を派遣した国は、アメリカのほかに、イギリス、オーストラリア、カナダなどであった。²しかし、そのほとんどがアメリカの宣教師であった。アメリカの宣教師らはムーディー（D. L. Moody）に代表されるアメリカの第3次大覚醒運動の宣教復興運動に直接的間接的に刺激された人物たちであった。³そして、彼らの信仰と神学は初期韓国キリスト教の信仰にも強い影響を及ぼした。彼らの信仰と神学に関する先行研究を整理すれば、「清教徒主義（Puritanism）」、「敬虔主義（pietism）」、「福音主義（evangelicalism）」などで要約することができる。⁴特に、この研究の主題である韓国キリスト教の初期大復興運動に関して、宣教師たちの信仰と神学は「福音主義」だと言えるのである。⁵

ところが、彼らは厳密な意味で、自国政府の指示と保護の下にある外国人であった。したがって、乙巳条約以来、韓国の実質的統治者である日本との関係において、自国の外交的指示を受けなければならない立場にあった。日本も母国が列強である来韓宣教師たちに対して、外交的配慮をせざるを得なかった。さらに、宣教師の韓国キリスト教での影響力を考えれば、朝鮮統監府における対宣教師政策は非常に重要なことで

あった。

宣教師と日本の関係については、おおよそ五つの時期に分けられる。⁶ 乙巳条約(1905年)以前までの時期において、アメリカとイギリスは韓国への日本の軍事的進出に無干渉政策を取ってきた。⁷ したがって、アメリカは韓国内の自国民、特に宣教師に「駐在国内問題に全く介入しないのが本国政府に対する国民の義務」と強調し、韓国内での日本の政治的動きに関与しないように訓令を下した。⁸ このようなアメリカの外交政策と米宣教本部の状況認識は、来韓宣教師の韓国に対する認識と態度に相当な影響を及ぼしたと思われる。

このような状況認識に基づいて、1901年9月、来韓宣教師らの宣教協議機関である長老会公議会で、「教会と政府間の関係のためのいくつかの条件(교회와 정부사이의 교제할 몇 조건)」という題名の「政教分離」の原則を確定した。⁹ 韓国での「政教分離」は、アメリカでの政教分離の本意と相当な差異があった。アメリカでの政教分離は、国家の教会に対する干渉を排除することで、宗教の自由を確保する目的であった。¹⁰ 反面、韓国キリスト教での政教分離は、宗教における政治関与を排除することで、宗教の非政治化の性格が強かった。

乙巳条約による「保護国化」は、韓国人にとって大きな衝撃であった。すなわち、「保護国化」は、結局日本の「植民地」への転落を意味することであったからである。国権喪失の民族的危機感は韓国キリスト者にも同じものがあつた。しかし、宣教師らは厳密な意味で外国人であり、韓国の国権喪失については如何なる行動もできなかった。のみならず、宣教師の個人的性向にもよるが、大部分の宣教師は日本の韓国支配をおおむね歓迎したようである。宣教師の状況認識はケーブル(E. M. Cable)の次の宣教報告書によく表れている。

終戦(日露戦争)によって、静かな朝の国(韓国)は消え去って、太陽の国(日本)がこの国を支配するようになった。……この変化が韓国を発展させるであろうと期待する。不法と不正の秩序が改善され、政治的無能と腐敗が清算され、日本の力強い統制の下で新政府が組織されれば、すべての人に正義のある行政を施し、さらに韓国だけではなく東洋の平和と福祉を確立していくであろう。¹¹

要するに、宣教師たちは、無能で腐敗した朝鮮王朝の統治より、「文明国」日本の統治が韓国人にとってよい事であると思ったのである。それで、乙巳条約に対する韓国人の抵抗と反発は、「偽造愛国の狂乱」として認識された。¹² 宣教師の目的である「福音伝道」を邪魔しない限り、日本の韓国支配を支持した。特に、当時メソジスト教会の日本と韓国の兼任監督であったハリス(M. C. Harris)は、1906年、初代朝鮮

統監の伊藤博文が赴任すると、「すぐれた能力と知恵を取り揃えた伊藤公のような人物が初代統監になったことはさいわいな事」と言うなど、日本の韓国支配を積極的に歓迎した。¹³このような事情から見ると、宣教師と日本政府の間にある種の友好的な関係が造成されたのは明らかである。

しかし、このような宣教師らの親日的態度は、日本政府の外交的努力と深い関係があった。初代朝鮮統監の伊藤博文は、ソウルに赴任するやいなや、まず宣教師たちに接見した。その後にも宣教師たちを随時に招いて宴会を開き、彼らをもてなし、宣教師の権利を侵害しないように官吏に命じた。¹⁴特に、伊藤は宣教師との談話会で、「政治上の一切の事案は私がそれを担当するが、今後朝鮮で精神的方面の啓蒙教化に関してはあなたたちが受け持ってください。それをもって、朝鮮人民を誘導する事業は完成されるでしょう」と言って、宣教費として毎年金1万円を寄付した。¹⁵これは朝鮮統監府による懐柔政策の一例である。

III. 大復興運動の発端と展開

1. 大復興運動の発端

韓国キリスト教会の初期大復興運動は、19世紀末の全世界的な復興運動の潮流と関係があった。要するに、アメリカの第3次大覚醒運動、イギリスのウェールズ地方の復興運動、インドのカーシア地方の復興運動などは、韓国キリスト教会の初期大復興運動に直接間接に影響を及ぼした。

しかし、初期大復興運動の直接的な発端になったのは、1903年の元山（ウォンサン）復興会である。この復興会は、1903年8月元山で開催された小さな祈禱会から始まった。1週間の祈禱会に、カナダ出身の医療宣教師のハーディ（R. A. Hardie）が招待され、聖書研究を導いた。彼はこの集いで、強い霊的体験をした。彼は、祈禱会での霊的体験を主日礼拝で公けに告白した。彼は、それまで5年間、宣教活動に努めたが、目立った成果を得ることができなかった。彼の宣教活動の不振は、白人としての優越感、高慢による権威主義、韓国の宗教文化の認識不足が原因であった。¹⁶ところが、韓国人信徒らは、ハーディの「告白を聞き、そして変化された彼の姿勢と生活を目撃し、キリスト教信仰の真の姿」が分かるようになった。¹⁷ハーディの信仰と宣教姿勢の変化は直ちに韓国人信徒にも影響を及ぼした。

その後、ハーディは、元山（ウォンサン）地域と江源道（ガンウォンド）地域を巡回して多くの教会で復興会を成功させた。しかし、ハーディの復興会は、時たま局地的に行われたものであった。より本格的な全国的規模の大復興運動は、1907年に平壤

(ピョンヤン)で開催された復興会から始まった。

平壤(ピョンヤン)復興会の全国的拡大は、米北長老派平壤宣教局の組織的努力の結果であった。平壤宣教局は、元山(ウォンサン)復興会を成功裏に導いたハーディ宣教師を招き、長老派とメソジスト派を網羅した連合復興会を計画した。¹⁸このために2ヶ月前から祈禱会をもって復興会を準備した。のみならず、規模と参加者の性格による多様な復興集会を緻密に計画した。復興会を成功裏に開催するため、このような準備は当然であると思われるが、その他にも別の事情があったようである。

1906年8月に平壤の私たちの長老派とメソジスト派の宣教師たちは、その状況の深刻さを悟り、祈禱と聖書研究のために1週間集まった。……私たちは、韓国教会が日本人を憎むのを悔い改めるだけでなく、神様に逆らうすべての罪に対して明らかな悟りがあるように望んだ。……私たちは、傷ついた魂を希望のない国家の状況から、自分の主イエス様との個人的関係へ移すことが必要であると感じていた。¹⁹

宣教師たちが感知した「その状況の深刻さ」とは一体何であったのか。乙巳条約の前後に、アメリカは親日的態度を取った。アメリカの親日的態度は韓国人の反米感情につながった。²⁰アメリカ人宣教師は、当時の韓国社会において、アメリカを象徴する存在でもあった。このような韓国社会の雰囲気は韓国キリスト教にも影響を及ぼした。ついに、韓国キリスト教の中にも、不穏な兆候が現れた。すなわち、「文明国」の日本について友好的認識を持っていた宣教師に対し、韓国人信徒の不満が高まっていったのである。これは日本に対する敵対感を越え、宣教師に対する敵対感につながるものであった。一例として、宣教師の韓国人の助力者たちが「売国奴」と呼ばれたり、命が脅かされたりしたこともあった。²¹万一、韓国キリスト者がアメリカを象徴する宣教師に反感を露骨に表したら、それまで心血を注いだ韓国宣教が一瞬にして水の泡になるかも知れない、という心配が、アメリカ人宣教師の間に広がっていった。

一方、韓国キリスト教の信徒たちは、国権回復運動へ積極的に参加した。それは、韓国社会のキリスト教への期待感の反応であった。しかし、宣教師たちは、韓国キリスト教の国権回復運動への積極的な参加について、過度に政治的な傾向であると判断した。まだ弱い韓国教会が政治的渦に巻き込まれたら、壊滅状態になるかも知れない、と懸念したのである。したがって、宣教師は、このような不穏な兆候を「その状況の深刻さ」として理解し、「その状況」を乗り越える何かが必要であった。この「傷ついた魂」が、過度の政治的参加と宣教師に対する敵対的姿勢から脱し、「主イエス様との個人的な関係へ移す」きっかけが必要であったのである。宣教師たちのこのようなジレンマが1907年平壤(ピョンヤン)の大復興運動につながったと思われる。²²

2. 大復興運動の展開様相

初期復興運動は、祈禱会を兼ねた聖書研究、いわゆる「査経会（さきょうかい）」の方式で行われた。査経会は、聖書研究による信仰の深化、祈禱会による信仰訓練として行われた。そして、未信徒にはキリスト教を紹介する伝道集会的性格もあつた。²³査経会は規模と性格によって、信徒全員と未信徒を対象にする大査経会、教会連合で開催する地域査経会、教会職員のための職員査経会、また牧師のみの小規模査経会に分けられた。²⁴そして、全国に平壤（ピョンヤン）の宣教師と韓国人リーダーを派遣することで復興運動が全国的に拡散するようにした。査経会は宣教師と彼らの助力者である韓国人職員によって指導された。したがって、復興運動の展開には宣教師と韓国人助力者の役割が非常に重要であった。²⁵

復興会の最も著しい様相は罪の公開的な告白であった。それは、1903年の元山（ウォンサン）復興会以来の現象であった。初期には人の前に立って自分の罪を告白する形であったが、その熱気があまりにも熱くて、説教が途切れたこともあつた。²⁶それで、1907年の平壤（ピョンヤン）復興会からは、通声祈禱に転換された。²⁷通声祈禱とは、礼拝時、別途に祈りの時間を定めて、参加者全員が声を出して、罪を告白するのである。復興運動の焦点は個人的な罪の告白に合わせられ、なによりも厳格な罪の意識が強調された。

韓国人のような民族は憎らしい罪の本性を明らかに分らないので、改宗の初期には、罪の本性が分かっている人々のような罪の思いを理解することができない。²⁸

要するに、宣教師たちは、韓国人の罪の思いが自分たちと異なっていると思い、厳格な罪の思いを強調したのである。韓国人信徒が告白した罪の内容は、殺人、姦淫、強盗、淫乱など犯罪的性格の罪もなくはなかったが、殆どの場合、嘘、憎悪、嫉妬、飲酒、喫煙などの個人倫理の罪であった。また、韓国が日本の支配下に置かれたことも韓国民族の罪の結果としてほのめかされた。韓国民族の試練は、むしろ「韓国人が神様に屈服することを学ばせるため」として考えられた。²⁹宣教師のこのような教えによって、韓国人信徒は、自らの罪が国家的試練の原因と思うようになり、徐々に現実の状況を受容しようとした。言い換えれば、復興運動を指導した宣教師たちは、罪の告白によって社会的現実から目を逸らせ、「主イエス様との個人的な関係」へ置き換えようとしたのである。³⁰社会的現実の無批判的受容は、結果的に韓国と日本間に厳然と存在する諸矛盾を隠蔽する役目を果たした。初期復興運動は、当時韓国民族が持っていた苦難を全く反映せず、むしろ民族的自覚を「純粋な福音的信仰」へ置き換えた。

とにかく、平壤（ピョンヤン）宣教局の努力によって、復興会は爆発的な成功を収めた。最初、10日間予定された復興会は、毎度、「席から起きて床に伏せ、泣き叫ぶ」参加者による熱気であふれた。³¹ 一度熱くなった復興会は、早天祈禱会と夜中の山上祈禱会につながり、冷えることはなかった。

韓国人信徒たちは靈魂のため、とても熱心に祈っている。夕方の集会後には山に上がり、凍りついた地に伏せて、聖霊降臨を願い、神様に泣きながら祈った。……平壤では教会堂で早天に祈禱をする習慣もできた。³²

予定された復興会は幕を閉じたが、その熱気は平壤（ピョンヤン）地域内のキリスト教系学校の学生にも伝播した。当時平壤には、平壤神学校、崇実（スンシル）学校、崇徳（スンドク）学校、光星（グァンソン）学校、崇義（スンイ）女学校などキリスト教系学校があった。教師と学生らは、授業を中断し、熱心に集会に参加し、さらに組を組んで市内と近隣の村で伝道を行った。³³

一方、復興運動の熱気は、平壤（ピョンヤン）宣教局から派遣された宣教師と韓国人リーダーによって、全国へ広がっていった。リー（G. Lee）宣教師は宣川（ソンチョン）で、スウォーレン（W. L. Swallen）は光州（コワンチュ）で、ハント（W. B. Hunt）は大邱（テグ）で、それぞれ地域巡回復興会を導いた。³⁴ 平壤集会の指導者として知られた吉善宙（ギル・ソング）（当時長老）は、ソウルと京畿道（ギョングド）地域で平壤と同じ運動を起こした。こういった復興運動は国内に止まらず、海外にも広がっていった。平壤の復興運動の状況を聞いた中国人牧師たちが平壤を訪ねた際に復興運動を目撃し、帰ってこれと類似の復興運動を起こしたのである。

3. 大復興運動の定着

復興運動は相当な勢いで全国へ広がったが、次の年まで続くことはできなかった。しかし、一部の宣教師は、復興運動の熱気を再度起こそうとした。それは「百万救霊運動」と名付けられた復興運動であった。平壤（ピョンヤン）での復興会が既存信徒を対象とした霊的覚醒運動（reawakening）であったとすれば、「百万救霊運動」は未信徒を対象とした福音伝道運動（evangelism）であった。

「百万救霊運動」を最初に計画したのは、1909年開城（ゲソン）の3人の南メソジスト宣教師であった。³⁵ 新しい復興運動の準備会で、ストックス（M. B. Stokes）が5万人への伝道を提案した。この提案は南メソジスト宣教部の年例会で「20万人をキリストの懐へ」というスローガンとして修正された。さらに、この提案は、「福音主義宣教部連合公議会（The General Council of the Evangelical Mission）」で「百万人をキ

リストの懐へ」というスローガンとしてまた修正され、ついに「百万救霊運動」が始まったのである。

「百万救霊運動」は、まずソウルにおいて教派と階層を超えた大規模な伝道団が組織され、全国へ巡回伝道を行った。これに伴い、地方でも伝道団が組織され、数万人が参加する大規模の伝道集会が開催された。ここには各地域のキリスト教系学校の教師と学生らも動員され、伝道運動と集会に参加した。³⁶

この伝道運動に珍しい伝道方法が導入された。その一つは、「献日 (day-offering)」という伝道方法である。これは、経済的事情の不如意な信徒たちが1週間に1日あるいは2日程度の自分の時間を捧げて伝道に献身する方法である。「献日」伝道は、信徒らに反響を呼び起こし、全国的に10万日が献じられた。³⁷ 他の伝道方法は、文書による伝道方法である。すなわち読みやすい伝道用のチラシを作って、各家を訪問して伝道する方法である。集会場所から離れている里人たちに効果的な伝道方法であった。

しかし、このような伝道方法と大規模集会にもかかわらず、「百万救霊運動」は平壤(ピョンヤン)復興会のような結果をあげることができなかった。この運動は、1911年まで行われたが、目標の百万人の10分の1にも及ばなかったのである。³⁸ 「心霊運動に数字的目標を挙げるというのは、信仰団体が取る正常な決意ではなかった」というある研究者の指摘のように、「百万救霊運動」は最初から達成できる運動ではなかったのである。³⁹

しかし、宣教師たちは、「この国をキリスト教化するための心理的きっかけ」になると信じていた。⁴⁰ ゲール(J. S. Gale)の次の述懐を見ると、当時宣教師たちがこの運動を如何に認識したのか、知ることができる。

その運動は韓国において特別な努力を要請するのである。百万名の救霊というスローガンは、民族的絶望が絶頂に至った時に広がっている。自らの過ちとして破滅と屈辱のどん底に落ち込み、自らの防衛と自主政治の能力を喪失したこの国の人々は、万国民に後ろ指をさされ、国家の主権は奪われ、財政権は他人の手に渡り、習慣的詐欺と欺瞞生活が終わった。今日に至ってすべてのものを剥奪されたこの国は救世主を求めている。今日は絶好の日である。私たちは明日を待つことができないし、予言することもできない。今日が伝道する日であり、ここが伝道する所である。開かれた伝道の門の前に謙遜に立っている幾多の民がみすばらしい心情で待っている。私たち宣教師は、この時が韓国の重大な峠であると確信している。⁴¹

1909年を宣教師たちは、韓日併合という亡国の悲痛さに落ち込んでいた韓国人に伝道する絶好のチャンスであると思った。すなわち、「今日が伝道する日であり、ここ

が伝道する所である。開かれた伝道の門の前に謙遜に立っている幾多の民がみすばらしい心情で待っている」と思った。言い換えれば、「万国民に後ろ指をさされ、国家の主権が奪われ、財政権が他人に渡った」痛嘆の状況で、少なくとも共に悲しむよりは、むしろ伝道の「絶好の日」として認識した。

結局、1910年8月22日、韓国は日本に完全に併合された。しかし、韓国キリスト教会は何らの動揺もなく、「百万救霊」の伝道運動を推進していた。韓日併合から数日後、宣川（ソンチョン）で開会された「長老会第4回独立老会」（1910年9月19日）では、すべての議案の前に「百万救霊運動」の決議案を通過させ、各代理会がこの運動を積極的に推進することを決意した。⁴² 韓国キリスト教会は、民族の非運を不問とし、「靈魂救済」と「天堂地獄」だけ叫ぶことを決意したのである。結果的に見れば、「日本の朝鮮併合が近づいたと見通した宣教師たちは、朝鮮キリスト者の宗教的エネルギーが政治的爆発へ転化することをあらかじめ阻むために、百万救霊運動を推進した」と見た日本の認識は、大復興運動の展開に対する日本の過剰反応ではなかった。⁴³

IV. 大復興運動の歴史的特質

韓国キリスト教会の初期大復興運動は、その躍動的勢いのように、韓国キリスト教に大きい影響を及ぼした。この影響は、まず韓国キリスト教会の外形的な変化を引き起こした。教会が量的に膨脹し、組織が整備された。そして、大復興運動は、韓国キリスト教の新しい信仰文化を形成し、信仰様態を大きく変えた。また大復興運動は韓国キリスト教の非政治化を促進させるきっかけともなった。ここでは、この側面を中心に、初期大復興運動の歴史的特質について探りたいと思う。

1. 外形の変化

大復興運動の歴史的特質として、まず、大復興運動は韓国キリスト教の外形的变化を引き起こしたという点をあげることができる。外形的变化はキリスト教会の量的膨脹と組織の整備として現れた。初期大復興運動は百万救霊運動を除いても、韓国キリスト教会の急激な成長（膨脹）の基盤になった。

<表3>で見られるように、復興会の結果は2年という短期間に、教会数、信徒数、献金額などすべての項目において、おおよそ200%以上の驚異的な増加を見せている。そして教会の成長基調はこの時期だけの現象に止まらず、以後の韓国キリスト教会に

＜表3＞1905年と1907年の教勢比較⁴⁴

| 年度 | 教会 | 伝道所 | 洗礼信徒 | 予備洗礼信徒 | 献金(ウォン) |
|--------|------|--------|--------|--------|-----------|
| 1905 | 321 | 470 | 9,761 | 30,136 | 1,352,867 |
| 1907 | 642 | 1,045 | 18,964 | 99,300 | 5,319,785 |
| 増加率(%) | 200% | 222.3% | 194.2% | 329.5% | 393.2% |

において「復興会による教会成長」という韓国キリスト教会の特質の一つとして定着した。

また大復興運動による外形的变化は、韓国キリスト教会の独自の組織整備（自治）の形として現れた。教会の自立は韓国宣教の大原則であるネビウス宣教政策の一つであったが、大復興運動の以前には自立意志が弱かった。だが、大復興運動を経ながら、韓国キリスト教の信徒たちは自発的に献金するようになり、またこの時から十分の一の献金文化と「聖米（献米）」文化も定着した。⁴⁵

一方、独自の組織整備（自治）は、韓国人教職者の輩出によって可能になった。大復興運動は復興会の指導ができる専門的な宗教的リーダーを必要とし、また多数の若者が宗教的リーダーを志望した。のみならず、教職者の養成機関が速やかに立てられ、韓国人牧師が輩出された。長老教会の場合は、1907年に韓国人牧師7人を輩出し、「朝鮮イエス教長老会独立老会（略称、独老会）」を創立した。そして、1912年9月には「朝鮮イエス教長老会総会」を創立し、独立教団を立てた。米監理教会の場合は、宣教会（Korea Mission）の組織を「朝鮮宣教年会（Korea Mission Conference）」（1908）に転換し、独自の年会を立てた。大復興運動により、韓国人による独自の教会運営をより早く促進させたのであった。

ところが、韓国人教職者の輩出と独自の組織整備は、別の変化を引き起こした。それは、韓国キリスト教信徒のリーダーシップが、一般信徒の指導者から韓国人牧師へ交替したという点である。韓国人牧師の不在期における韓国キリスト教の信徒は、社会的に徳望ある一般信徒によって指導された。彼らは、たいてい愛国的観点を持ってキリスト教へ入信したので、社会運動への参加にも積極的であった。彼らの影響によって、韓国キリスト教が独立協会運動や万民共同会運動、そして愛国啓蒙運動に積極的に参加することができたのである。ところが、大復興運動以後、新しいリーダーたちは、何よりも宗教的なリーダーとして認められたので、宗教的役割のみに限定された。また彼らは、「純粋な福音的信仰」に誰よりも模範的であった。このリーダーシップの交替によって、韓国キリスト教が以前と異なる様相をおびるのは、当然であった。

ところで、問題の要点は、リーダーシップの交替が教権を強化する方向へ定着していったという点である。すなわち公的組織としての教会は、教職者によって掌握され、

教職者が伝える「純粋な福音的信仰」から逸脱した行為は認められなかった。言い換えれば、教会は、信徒個人の政治行為について問わないが、教会が政治運動の場になることは決して許さなかったのである。一例として、平壤（ピョンヤン）の山亭峴（サンジョンヒョン）教会に赴任した周基徹（チュ・ギチョル）牧師は、「純粋な福音的信仰」が疑われるという理由で、曹晩植（チョ・マンシク）長老など社会的に徳望ある信徒リーダーたちに教会から離れることを要請したこともあった。⁴⁶ 公的教会組織から認められないキリスト者は、もはや公的教会組織と別の系譜を形成しなければならなかった。

2. 信仰の内面化

大復興運動の二番目の歴史的特質は、キリスト教信仰の内面化である。すでに述べたように、大復興運動期の通声祈禱と早天祈禱会は、韓国キリスト教会の日常的信仰文化として定着した。また「百万救霊運動」での熱誠的伝道文化も教会の底辺に定着した。

ところが、これは韓国人にとっては新しい宗教文化であった。集団的に宗教集会を持ち、祈禱において神と直接的に意志を通わせ、神の前で自分の罪を公開的に告白し、そこで心理的解放感を得、内面的良心を回復し、さらにこのような体験を家族と隣人に伝えるというのは、以前の朝鮮社会ではありえない現象であった。大復興運動以前、韓国キリスト者のキリスト教理解はシェルターとしての理解、近代化の窓口としての理解、そして新しい精神文化としての理解などが混合していた。ところが、大復興運動によってキリスト教は、名実共に宗教文化として腰を据えるようになったのである。このように大復興運動以後の新しい信仰文化は、それ以前には皮相的に認識されていたキリスト教信仰が韓国民族の生活文化に深く根付くきっかけになったのである。

ところで、韓国キリスト教の信徒に根を下ろした信仰の核心は、宣教師によって伝えられた福音主義的信仰であった。特に、当時の福音主義は、祈禱による個人の体験的信仰を強調した。個人的な体験は、内面の良心を回復する「純粋な福音」として理解された。これは「キリスト教信仰の本質」と理解された。それは、絶対的権威を持っていた聖書の文字的解釈によって正当化された。ハーディ（R. A. Hardie）の述懐で「純粋で福音的な」信仰の一断面をうかがうことができる。

私の高慢と心の頑なさや信仰の不足を自白すると、会衆は強い罪意識と悔い改めの体験的信仰を初めて悟るようになった。神様の約束を信じる単純な信仰として聖霊の恩賜をいただいたことを知らせた。⁴⁷

要するに、強い罪意識による心理的圧迫感から、この圧迫感の源泉である自分の罪を会衆の前で告白し、告白の行為による心理的解放感が聖霊の体験になり、この体験が神の恩賜であることを単純に信じることが、いわば「純粋な福音」的信仰であるというのである。もちろん、キリスト教において、神によって罪が赦されるという心理的解放感は、非常に大切な信仰である。特に、社会的不安と精神的恐慌が広がった時、このような心理的解放感は、キリスト教の優れた宗教的貢献であった。のみならず、内面的良心の回復は儒教的倫理体系の代案として十分な価値があった。

ところで、問題の要点は、「純粋な福音的信仰」が二元的な信仰を胚胎したことである。内面的良心の回復、体験的信仰を強調したあまり、韓国キリスト者の世界観を霊と肉、彼の世と此の世、体験と理性、信仰と生、教会と社会、福音と状況などに二極化した。「純粋な福音的信仰」の範疇からはずれたものは、認められなかった。言い換えれば、祖国が他国によって侵略され、「万国民に後ろ指をさされ、国家の主権は奪われ、財政権は他人の手に渡った」亡国の民として悲しむのは、「純粋な福音的」信仰ではなく、「教会から隔離されなければならない」ことであった。⁴⁸すなわち、内面化された個人的体験の信仰以外には、例えば韓国の伝統、理性的価値、社会の要請、祖国の危機状況と言っても、非霊的で、非福音的で、非教會的で、非信仰的で、純粋ではないこととして排除の対象になった。

このような問題点は、福音主義を説く宣教師たち、彼らの信仰、さらに彼らが体現していた西欧文化に対する漠然とした憧れに結び付いた。これは、宣教師たちが持っていたオリエンタリズムと帝国主義の間接的受容を意味するのである。⁴⁹このような傾向は、西洋（特にアメリカ）に従属的な信仰（神学）と伝統文化への蔑視をもたらした。そして、大復興運動で韓国キリスト教に定着したこのような福音主義は、以後根本主義（Fundamentalism）と結合し、「根本主義的福音主義」として韓国型福音主義の典型になった。⁵⁰

3. 韓国キリスト教の非政治化

第三に、大復興運動の歴史的特質として、韓国キリスト教会の非政治化をあげることができる。韓国キリスト教の非政治化問題は、1901年の「政教分離」の宣言にまでさかのぼる。しかし、宣教師の政教分離政策にもかかわらず、韓国キリスト教が直ちに非政治化したとは言えない。当時、韓国キリスト教のリーダーであった一般信徒グループは、韓国キリスト教の社会的責任について適切な行動をしたからである。

ところが、大復興運動によって、状況は変わった。韓国キリスト者の信仰が内面化過程を経ながら自然に非政治化したのである。勿論、このような結果は決して偶然ではなく宣教師によって十分に予想された。宣教師は「傷ついた魂を希望のない国家の

状況から、自分の主イエス様との個人的関係へ移すのが必要であると感じて」いた。それで亡国の悲痛さに落ち込んでいる「傷ついた魂」がややもすれば無謀な政治的怒りを表出しないように、復興会のような福音的宗教行事が必要であったのである。

とにかく、宣教師の予想は的中した。韓国キリスト者は、強い罪意識と罪の告白によって、亡国の悲痛さから関心を逸らせ、「靈魂救済」という心理的解放感を得ることができた。このような体験を得た人々が、たとえ亡国と言っても現実的権力である日本に対抗するはずがなかった。むしろ韓国キリスト者は、日本の軍事力による平和と秩序を維持するのに先立った。

1907年、国王廃位と関係した騒擾が、あっという間に全国に波及した。この期間、教会が見せてくれた行為は賞賛に価する。騒擾の可能性が最も高かったソウルと平壤で、キリスト者はその影響力を發揮し、秩序を破壊しようとする人々を圧することとし、法と秩序を維持するのに寄与した。……このように安定を維持することができたもっとも大きい原因は、教会が住民を慰撫したことにあった。……キリスト教の指導者たちが住民を慰めながら懐柔した結果、血の殺戮を避けることができ、秩序が維持された。このような地域では、先に復興運動が起きて、教会が法と秩序を維持する能力を取り揃えるようになっていたという点に注目する必要がある。⁵¹

これは、1905年に乙巳条約が締結された時の韓国キリスト教の「救国祈禱会」とは打って変わった有様である。1910年、韓国が日本に完全併合された時、韓国キリスト教は「靈魂救済」を叫び、「百万救霊運動」を決意していた。このように短期間に韓国キリスト教の性格を切り替えることができた要因は、大復興運動で形成された信仰の内面化の影響である。また、リーダーシップの交替による影響もあった。次は、そうした一断面をよく表している。

北部地方では韓国人信徒、特に平壤の吉善宙（ギル・ソンジュ）牧師がいなかったら、過激な気質として有名なこの地域の人々が暴動を起こしたかも知れない。しかし吉牧師は人々に「すべての権勢は神様から」と説得し、教会が彼を助けたので、西北地方人の怒りを鎮めて韓国をおびただしい流血の悲劇から助け出すことができた。⁵²

韓国キリスト教の非政治化について宣教師たちは歓迎した。宣教師の認識上、韓国キリスト教は「清められて新しいもの」になったのである。⁵³ 乙巳条約の時、韓国キリスト教について「宗教救国論」を気兼ねなく論じた『大韓毎日新報』は、大復興運動を見てから、「靈魂救済と天堂地獄の禍福のみを求めて、国家民族の存亡に無関心

な運動」であったと酷評した。⁵⁴ 当代の主要日刊紙であった『大韓毎日新報』の酷評は、当時の識者の認識を間接的に表すものでもあろう。このような脈絡で、一部の信徒たちは韓国キリスト教会の非政治化の傾向に反感を抱いた。⁵⁵ この余波のため、キリスト教を去る信徒が数多く生じ、教会が閉鎖される所も少なくなかったと伝えられる。⁵⁶

しかし、韓国キリスト教の非政治化は、単純に信徒たちが教会を去る問題に止まらない。被支配者の政治的無関心は支配者が最も望む状況である。その支配権力が、不当かつ不義であるほどそうである。故に、政治について関心を逸らすのは、本来の意図にはかかわらず、現実的な権力の意図に順応してしまう最も政治的な行動に他ならない。このような脈絡において、大復興運動の非政治化は、韓国キリスト教にとって、如何なる性格の権力にもたやすく順応するようになってしまう結果を生んだ。また、消極的な意味だけではなく、「すべての権勢は神様から」といって、積極的に現実権力の法と秩序に役立った。したがって、非政治化は、以後の歴史的流れの中で、韓国キリスト教の権力順応的姿勢、時には「政教癒着」的姿勢の最も力強い論理的根拠になった。

V. 結 論

以上で論じたとおり、韓国キリスト教の初期大復興運動は、韓国キリスト教の新しい信仰様態を形成し、キリスト教信仰の定着と量的成長のきっかけとなったが、当時の民族の痛みと怒りを個人の内面的体験という宗教的カタルシスによって希釈した宗教行為であったと見られる。また大復興運動は、韓国キリスト教の没歴史的な非政治化の過程であった。そして、宣教師の信仰と神学の影響が韓国人教職者たちへ移植された結果、韓国キリスト教の神学の貧困、社会倫理不在の霊魂救済、政治無関心主義、合理性の欠如、極端な二元論的信仰、伝統宗教に対する無理解などの傾向を生んだのである。

一方、韓国キリスト教の社会運動的観点から見ると、大復興運動は韓国キリスト教のリーダーシップの交替によって社会運動の様相を変えた。言い換えれば、韓国キリスト教は大復興運動を経ながら、教職者中心の非政治的性格をおびる公的教会組織と、一般信徒中心の社会運動に積極的な「包括的キリスト教団体」として二分化したのである。したがって、韓国キリスト教社会運動は、包括的キリスト教団体を中心として行われたが、組織的な面（人的側面）と、理念的な側面（神学的側面）で、弱くなった。もちろん、包括的キリスト教団体には、公的教会の一般信徒も多数参加したが、その運動の実践方法は、公的教会組織の信徒たちの信仰的価値を損なわない範囲で行

われるしかなかった。すなわち、なるべく法と秩序を維持する運動様態を取るしかなかったのである。このような条件によって、韓国キリスト教社会運動の「人道的平和主義（非暴力主義）」が形成されたと思われる。それ故、キリスト教勢力が主軸になった三・一運動において、運動の主な精神として人道的平和主義が現れたのである。

注

1 初期韓国キリスト教の大復興運動に関する主要論著は次のようである。

盧大俊（ノ・デジュン）「1907年 改新教 大復興運動의 歴史的 性格（1907年改新教大復興運動の歴史的な性格）」、高麗大学校修士学位論文、1987。

閔庚倍（ミン・ギョンベ）『韓国基督教会史』、延世大学校出版部、1998。

朴明洙（パク・アヨンシュ）「성결운동과 한국교회의 초기 대부흥（聖潔運動と韓国教会の初期大復興）」『한국기독교와 역사（韓国基督教と歴史）』15号、2001。

朴鍾賢（パク・ジョンヒョン）「韓國國會의 信仰內燃과 그 外延構造의 相關關係 研究（韓国教会の信仰内燃とその外延構造の相関関係研究）」、延世大学校博士学位論文、1999。

白樂濬（ベク・ナクジュン）『韓国改新教史』、延世大学校出版部、1973。

宋吉燮（ソン・ギルソプ）『韓国神学思想史』、大韓基督教出版社、1997。

李萬烈（イ・マンヨル）『한국기독교와 민족통일운동（韓国キリスト教と民族統一運動）』、韓国基督教歴史研究所、2001。

李徳周（イ・ドクジュ）『한국토착교회형성사연구（韓国土着教会形成史研究）』、韓国基督教歴史研究所、2001。

全沢堯（ジョン・テップ）『韓国教会發展史』、大韓基督教出版社、1993。

朱在鏞（ジュ・ゼヨン）「한국교회 부흥운동의 사적 비판（韓国教会復興運動の史的批判）」『韓国基督教史研究』15号、1986。

2 この時期（1885～1945）に韓国に派遣された宣教師1529人を国籍別で区分すれば、次のようである。

＜表1＞プロテスタント宣教師の国籍別統計(1945年まで)

| 国籍 | 宣教師数 | 比率 | 備考 |
|---------|------|-------|-------|
| 米 国 | 1059 | 69.3% | 長、メ含め |
| イギリス | 199 | 13% | |
| カナダ | 98 | 6.4% | 英連邦 |
| オーストラリア | 85 | 5.6% | 英連邦 |
| その他 | 88 | 5.7% | 国籍不明 |
| 合計 | 1529 | 100% | |

金承台・朴真眞編『내한선교사총람 (来韓宣教師総覧)』、韓国基督教歴史研究所、1994から参照。

- 3 例えば、アメリカの第3次大覚醒運動期に海外宣教ボランティア学生らが結成した「外国宣教学生ボランティア運動 (SVM: The Student Volunteer Movement for Mission)」の学生のゲール (J. S. Gale) とモット (J. R. Mott) は初期韓国宣教に大きな貢献をした。また、「全米神学校同盟 (The American Inter-Seminary Alliance)」に刺激を受けて海外宣教を志望し、来韓したアメリカ宣教師が多い。特に1907年大復興運動に決定的な影響を及ぼしたジョンソン (H. A. Johnson)、ホワイト (M. C. White)、モフェット (S. A. Moffett)、グリフィス (W. E. Griffis)、ブレア (R. W. Blair)、ロス (Cyril Ross)、リー (Graham Lee) はこのような背景のもとでアメリカから派遣された宣教師であった。
- 4 来韓宣教師の信仰と神学について、詳しいことは次の資料を参照すること。柳大永 (ユ・デヨン) 『성기미국선교사연구 (初期米国宣教師研究)』、韓国基督教歴史研究所、2001; 朴鍾賢 (パク・ジョンヒョン) 『韓國教會의 信仰內燃과 그 外延構造의 相關關係 研究 (韓国教会の信仰内燃とその外延構造の相關関係研究)』、延世大学校博士学位論文、1999; 白樂濬 (ベク・ナクジュン) 『韓國改新教史』、延世大学校出版部、1973、pp. 96~177; 宋吉燮 (ソン・ギルソプ) 『韓國神學思想史』、大韓基督教出版社、1997、pp. 35~77; 李萬烈 (イ・マンヨル) 『한국기독교와 민족통일운동 (韓国キリスト教と民族統一運動)』、韓国基督教歴史研究所、2001、pp. 59~170; 李徳周 (イ・ドクジュ) 『韓國土着教會形成史研究』、pp. 47~86; 趙英烈 (ジョ・ヨンヨル) 『在韓宣教師研究』、建国大学校博士学位論文、1994。
- 5 福音主義 (evangelicalism) という語は、教派によって少しずつ異なって使われるが、来韓宣教師らが持っていた認識は、1920年代「根本主義-自由主義論争」以前のアメリカ主流プロテスタントの「福音的共感 (evangelical consensus)」があった時期の福音主義と考えられる。例えば、「聖書の權威、以信義人論、キリストの再臨と審判の絶対性、三位一体の強調」などで要約することができる。これは韓国キリスト教において、「長老教信条」(1907) と「監理教会信条」(1910) に共通して現れる概念である。
- 6 <表2>宣教師と日本の関係についての時期区分 (1894~1945)

| 時期区分 | 主要歴史的事件 | 日本の対宣教師政策 | 米・英-日本の関係 |
|------------------------|-----------------------|----------------|------------|
| 1 期：牽制期 1894~1905 | 日清戦争、日露戦争、乙巳保護条約 | 外務省による牽制政策 | 友好的協力関係 |
| 2 期：利用期 1906~1910 | 丁未7条約、韓日併合 | 統監府による懐柔政策 | 友好関係の弱化 |
| 3 期：抑圧期 1911~1919 | 第1次世界大戦勃発、3・1運動 | 総督府による抑圧政策 | 東アジアでの利権対立 |
| 4 期：分裂策動期 1920~1935 | 満州事変、神社参拝強要 | 総督府による分裂政策 | 対立葛藤の深化 |
| 5 期：追放期 1936~1945 | 太平洋戦争勃発、日本の敗戦 (朝鮮の解放) | 総督府による弾圧及び追放政策 | 極端な対立関係 |

金承台 (キム・スンテ) 『韓末日帝侵略期における日帝と宣教師の関係 (1894~1910)』、p. 37から参照。

- 7 その代表的な例として、第1、2次日英同盟と、「日米秘密協定 (桂-テプト密約)」をあげることができる。
- 8 具沃列 (グ・デヨル) 『韓國國際關係史研究』1、歴史批評社、1996、p. 108。

- 9 「 그리스도신문 (キリスト新聞) 」 1903年10月 3 日付けに載せられた「政教分離」に関する 5 原則を整理すれば次のようである。
1. 私たち牧師は国の事と、政府の事について全く干渉しない。
 2. 大韓国と私たちの国 (宣教師本国) には条約があるから、それに従うべきであり、教会の事と国の事は異なり、教会は国の事を取り扱わない。
 3. 基督教会に入信した信徒は大韓の民として国法を守るべきである。
 4. 教会は個人の政治的行動を促すことも禁ずることもせず、信徒の政治的行動に対する責任は教会が担当することも保護することもしない。
 5. 教会は聖霊の家であり、国の事を取り扱う家ではないので、礼拝堂や教会の舎宅や教会学堂での政治的集會を禁じ、特に牧師の舎宅では厳しく禁じる。
- 10 「政教分離」を英語で表現すれば、Separation of Church and State、すなわち「教会と国家の分離」である。これは、Separation of Politics and Religion、すなわち「政治と宗教の分離」ではないのである。森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』、講談社、1996、pp. 34～37。
- 11 E. M. Cable, “West Kyung-keui and Chung Cheng District,” *Official Minutes of Annual Session of the Korea Mission Conference of Methodist Episcopal Church*, 1906, p. 32; 李徳周 (イ・ドクジュ) 『韓国土着教会形成史研究』、pp. 44～45から再引用。
- 12 閔庚倍 (ミン・ギョンベ) 『韓国基督教会史』、p. 233。
- 13 李徳周 (イ・ドクジュ) 『韓国土着教会形成史研究』、p. 45。
- 14 金承台 (キム・スンテ) 『韓末日帝侵略期における日帝と宣教師の関係 (1894～1910)』、p. 46。
- 15 半井清 『朝鮮の統治と基督教』、朝鮮総督府学務局、1921、p. 6。
- 16 全沢堯 (ジョン・テップ) 『韓国教会発展史』、大韓基督教出版社、1993、p. 158。
- 17 李徳周 (イ・ドクジュ) 『韓国土着教会形成史研究』、p. 91。
- 18 盧大俊 (ノ・デジュン) 「1907年改新教大復興運動의 歴史的 성격 (1907年改新教大復興運動の歴史的 성격)」、高麗大学校修士学位論文、1987、p. 17。
- 19 W. N. ブレア、金承台訳 『속히 예수 믿으시기를 바라나이다 (素早くイエス信じるように望むのです)』、두란노출판사 (デュランノ出版社)、1995、p. 50: この本は当時平壤復興の目撃者であったアメリカ北長老派宣教師の William Newton Blair が1946年に発行した *Gold in Korea* という本を金承台が翻訳したものである。
- 20 W. N. ブレア、金承台訳 『속히 예수 믿으시기를 바라나이다 (素早くイエス信じるように望むのです)』、pp. 95～96。
- 21 閔庚倍 (ミン・ギョンベ) 『韓国基督教会史』、p. 274。
- 22 閔庚倍 (ミン・ギョンベ) 『韓国基督教会史』、p. 273。
- 23 李徳周 (イ・ドクジュ) 『韓国土着教会形成史研究』、p. 134。
- 24 ここで、職員とは、「助事 (helper)」、「領袖 (leader)」、伝道人、売書人、宣教師のための韓国語教師、

聖書翻訳助力者などで、彼らは宣教師の補佐役を担当した。また、彼らは宣教師と韓国人信徒の架け橋の役割をしたため、初期韓国キリスト教においてリーダーとしての役目を担当したと思われる。白樂濬（ベク・ナクジュン）『韓国改新教史』、p. 314。

- 25 同上。
- 26 朴鍾賢（パク・ゾンヒョン）『韓国教会の信仰内燃とその外延構造の相関関係研究』、p. 44～45。
- 27 李徳周（イ・ドクジュ）『韓国土着教会形成史研究』、p. 110～116。
- 28 李徳周（イ・ドクジュ）『韓国土着教会形成史研究』、p. 138。
- 29 盧大俊（ノ・デジュン）『1907年改新教大復興運動の歴史的 성격』、p. 40。
- 30 盧大俊（ノ・デジュン）『1907年改新教大復興運動の歴史的 성격』、p. 35。
- 31 李徳周（イ・ドクジュ）『韓国土着教会形成史研究』、pp. 110～133。
- 32 白樂濬（ベク・ナクジュン）『韓国改新教史』、p. 394。
- 33 韓国基督教歴史研究所『韓国キリスト教の歴史』Ⅰ、p. 272。
- 34 李徳周（イ・ドクジュ）『韓国土着教会形成史研究』、pp. 110～133。
- 35 三人の宣教師は、ストックス（M. B. Stokes）、ギャンプル（F. K. Gamble）、リード（W. T. Reid）であった。韓国基督教歴史研究所『韓国キリスト教の歴史』Ⅰ、p. 277。
- 36 白樂濬（ベク・ナクジュン）『韓国改新教史』、p. 404。
- 37 同上。
- 38 韓国基督教歴史研究所『韓国キリスト教の歴史』Ⅰ、p. 281。
- 39 白樂濬（ベク・ナクジュン）『韓国改新教史』、p. 403。
- 40 同上。
- 41 同上。
- 42 金良善（キム・ヤンソン）『韓国基督教史研究』、基督教文社、1971、p. 90。
- 43 尹健次（ユン・コンチャ）『朝鮮近代教育の思想と運動』、東京大学出版会、1982、p. 388。
- 44 閔庚倍（ミン・ギョンベ）『韓国基督教会史』、p. 281。
- 45 聖米とは、主に女信徒によって行われたが、毎炊事時、一握りずつためた米を教会に差し上げる献納物であった。教会に差し上げられた聖米は教会職員の食糧と共同体食事にあてた。
- 46 閔庚倍（ミン・ギョンベ）『日帝下韓国基督教 民族信仰運動史（日帝下の韓国キリスト教民族信仰運動史）』、大韓基督教書会、1991、p. 23。
- 47 白樂濬（ベク・ナクジュン）『韓国改新教史』、p. 385。
- 48 閔庚倍（ミン・ギョンベ）『韓国基督教会史』、p. 273。
- 49 この点に関する詳細は次の論著を参照すること。柳大永（ユ・デヨン）『初期美国宣教師研究』、pp. 158～264。
- 50 このような「根本主義的福音主義」としての韓国型福音主義は、大復興運動より後のことではあるが、1925年にスウェーデンのストックホルムで開かれた「生活と事業（Life and Work）」エキュメニカル大

会 (Ecumenical Conference) で、福音を「人間生活のすべての領域—産業的、社会的、政治的、国際的領域に適用すべき教会の責任」と確言していることとは非常に異なっている。『エキュメニカル運動と神学辞書』II、韓国キリスト教教会協議会 (KNCC)、「エキュメニカル」項目参照。

- 51 G. H. Jones & W. A. Noble, *The Korea Revival*, The Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, 1910, pp. 41~42 : 李徳周 (イ・ドクジュ) 『韓国土着教会形成史研究』, pp. 154~155から再引用。
- 52 李萬烈 (イ・マンヨル) 『韓国キリスト教と民族統一運動』, p. 110。
- 53 閔庚倍 (ミン・ギョンベ) 『韓国基督教会史』, p. 275。
- 54 『大韓毎日新報』, 1910年4月15日付け。
- 55 閔庚倍 (ミン・ギョンベ) 『韓国基督教会史』, p. 276。
- 56 同上。